

XXIII



英國に就て
埋れ木
覺書

集英社

吉田健一著作集 第二十三卷

英國に就て 埋れ木 覺書

昭和五十五年七月二十日 第一刷印刷

昭和五十五年八月四日 第一刷發行

著者 吉田健一

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號

電話 東京(二三〇)六三六一〈文藝出版部〉

東京(三三八)二七八一〈販賣部〉

整版所 株式會社中臺整版

印刷所 大文堂印刷株式會社

製本所 株式會社石橋製本工場

©1980, Nobuko Yoshida, Printed in Japan

0395-171023-3041 落し本・亂し本はおとりかへしませ

吉田健一著作集 第二十三卷 目次

英國に就て

象徵

英國昨今

英國紀行

英國の文化の流れ

英國の形

ヴィクトリア風

英國の繪

*

英國の飲み屋

ロンドン

埋れ木

五

セ

三

七

三

五

五

七

七

六

九

五

覺書

解題

四一

二五

英國に就て

象徴

英國に山はない。尤も、どこを英國と見るかといふ問題もあつて、英國といふ國が占めてゐる島の北部のスコットランドも、西南部のウェエルスも中部、及び南部のイングランドと同様に英國と考へるならば、ウェエルスにもスコットランドにも山嶽地帯があるが、普通に英國人とか、英國の文學とか、家具、料理とか言ふ時にそれが指すのは民族の發祥の地であるイングランドであつて、これは北はスコットランドとの國境から南は英國海峡まで山と呼べるやうなものがないのである。それ故に、富士が日本を象徴するといふ意味でそれに相當するものを英國に求めるならば、何か山ではないものを探さなければならない。

この日本と英國の違いは旅行をするときよく解る。日本で例へば少しでも汽車に乗つてゐると、必ずどこかに山が現れて、地方によつてその山の恰好に特色があり、箱根を過ぎて關ヶ原に掛る頃には山を見るだけで關東から關西に來たことがはつきりする。英國ではどこまでも平地か、低い丘陵地帯が続いて、それが南部では果樹園になつてゐるのが北に行くに従つて所どころに森があるのを圍む牧場

や麥畑に變り、更に沼澤や炭田が現れて、やがて草の色まで南部とは違ふうら寂しい牧場になる。併しその全體の印象を一括して言ふならば何か如何にも優しい感じがして、牧場といふのをもう少し説明すれば、日本ならば芝生と呼んだ方がよささうな緑の草原であり、落葉樹が多い森は春は若葉、秋は紅葉で日本では山地に行かなければ見られない變化に富んだ色彩を呈し、それに村の古風な民家や教會の塔が配されてゐたりすると、繪にも増してこれは繪だといふ感じがする。又、日光がさういふ具合に差して、炭田や工場地帶も、そのやうなものとは思へなくなる。

英國人と言ふと、例へば、世界に誇る海軍とか、大帝國の建設とか、探險とか、冒險とかいふことが先づ頭に浮ぶ。エヴェレスト登山があり、スコットの南極探險がありといふ風で、それに就て我々は英國人といふのが千何百年か前に北歐から海を渡つてやつて來た蠻族の子孫なのだといふことで説明出來た氣である。それはさうなのかも知れないが、祖先の血といふのはそれ程長い間變らずにあるものではなくて、その上に、英國人が北歐の蠻族の子孫だといふのはその他にロオマ人、フランス人、及びケルト系の原住民の血も英國人に多分に混じつてゐるのを忘れてのことであり、更に又、そのやうに、家系を洗ひ立てるだけでは山が一つもない國が多く、第一級の登山家を出し、繪としか思へない土地に住んでゐるものが世界に雄飛するといふ謎が解けるものではない。つまり、質實剛健は結構で、英國人がやることには確かにさういふことを言ひたくさせるものがあつても、英國の風土はさうした民族の國といふ印象を與へないのである。

それならば、英國人そのものはどうかと言ふと、これもインドを經略したり、アラビアの大沙漠を横斷したり、世界の海運を獨占したりするといふやうなことから想像する種類の人間とは凡そ違つて

ゐる。

彼等自身が認めてゐる通り、はにかみ屋で引つ込み思案で、動物を可愛がり、人間に對しても意地悪をする氣になかなかならず、はつきりものが言へなくて、それでよく一人前に暮して行けるものだといふ感じがする。勿論、かういふことを書くのに就ては英國人といふものはとか、日本人といふものはとかと一國の人間を十把一からげに判斷する危険が伴ひ、外觀だけで中身が解るものではないといふこともある。併し兎に角、一般に英國といふものから受ける印象は質實剛健の反對であつて、それのみならず、實際に英國人と付き合ひ、少しの間でも英國の土地に住んで見るならば、この印象が決して上邊だけのものではないことが明かになる。

優しい心の持主だから弱くて何も出来ないといふのは弱い人間が考へることである。さういふ弱い人間といふのは心がこちこちに干からびてゐるので、固いもの程折れ易い。英國人のことに話を戻すならば、英國の景色が繪の世界を思はせるのと、英國人が世界中に出掛けて行つて自分達の國とは似ても似つかない所に根を降したといふことは關係がないことではなくて、彼等は土地に對する愛着といふことを先づ彼等の國の風土に教へられ、それを忘れないでゐて彼等が行つた先の土地にも愛着を覺えることが出来た。もしそれを忘れさうになつた時は彼等の國の記憶が、自分が住む土地をどう考へるべきか、そこでどう住むべきかを彼等に思ひ出させた。かういふ心の優しさには質實剛健などといふことに期待出来ない底力があつて、それが祖國を死守する勇氣にもなれば、一つの帝國の建設にもなる。第一次世界大戰の時にルパート・ブルックが戦死する前に、自分が埋る場所に英國の一隅があると云つたのは詩人の誇張ではないのである。

さういふ英國と英國人を象徵するものに何を選ばいいのか。併しまだこれだけではそのやうなことを考へるのに早過ぎるので、例へば優しい心、或は柔軟な心がなければ本當に無慈悲であることも望めないといふこともある。それは相手の身になることが出来なければ相手を徹底的に苦める譯に行かないからであつて、自分が相手になり切つた時に始めてその息の根が止められる立場に置かれる。まだ心を鬼にしてなどといふことをやつてゐる間は隙が幾らもあつて、心を鬼にするのは眼をつぶることであり、それで相手に打撃を加へる氣でゐるといふのも可笑しい。又それならば、惡辣である爲にも親切であるといふのがどういふことか解つてゐなければならなくて、さういふ人間の手に掛つた時に我々は本當にひどい目に會ふ。例へば、それは薔薇の棘の痛さといふやうなものだらうか。その痛さを知らないものは、薔薇の枝を握り締めて見るといい。

まだスコットランドが獨立した王國だつた時代にその王室の紋章は薊で、標語のラテン語は、誰も傷かずに私に觸れることは出来ないといふ意味のものだつた。如何にも強國にいちめ付けられ續けて自尊心ばかり強くなつた小國らしい紋章であり、標語であるが、棘の痛さにかけて薔薇は薊の比ではない。その薔薇は英國の國花であつて、かう書いて來ると、英國人にとつて薔薇がさういふものであるのが偶然ではないといふ氣がする。勿論、英國人が薔薇を珍重し、その栽培に力を入れたのはその棘が痛いからではなくて、花が殊にヨオロッパの自然の中では如何にも優しい感じがするものだからであり、それが又、英國の自然に實によく合つてゐる。例へば、チュウリップなどは花壇を一面にその花の色にするのに適してゐるが、薔薇はその花だけを見るものではなくて、葉も枝もあつて始めて花が生き、それが薔薇の優しさを引き立てて、英國の庭といふのはヨオロッパ大陸諸國のと違ひ、自

然をそのままの形で住居の近くに持つて來ることを目指してゐる。

薔薇にとつてその棘は花と同様に大事かも知れないが、このやうな花にその位の棘があるのは當然といふ見方をすることも許されて、英國人はその花を愛して來た。薔薇戦争の時に一方が赤い薔薇をその印に選び、一方が白い薔薇を印にして對抗したといふのはその優雅に殆ど東洋的なものがあることを思はせるとともに、既に十五世紀に英國人が薔薇を庭に植ゑてゐたことを示してゐて、そのお蔭で薔薇戦争といふ戦史に餘り類例がない名稱が出來た。スコットが南極から歸つて來る途中の最後の野營地で書いた遺書にも薔薇の花の優しさを思はせるものがある。ここで大事なのは、その優しさが英國人といふものの性格に見られる一切の原動力になつてゐるといふことで、英國人の忍耐力も、勇氣も、冷酷も、詩情もそこから出てゐる。さう言へば、富士の山としての最も大きな特徴もその姿の優しさにある。

英國昨今

英國も昔と變つて、それもひどい變りやうだと日本を立つ前に色々な人に威されたが行つて見て別にさういふ印象は受けなかつた。どこにでもあることが英國にもあつた所で殊更にどうといふことはなくて髪を長くした男や履くものを短くした女がどれだけでもそれは空氣も同然で驚くに當らない。英國が本當に變つたと思つたのは十六年前に例の福祉國家の制度が實施されたばかりの昭和二十八年に戦後に初めて英國に渡つた際で夏で英國女王の戴冠式が行はれたばかりであり、そのお祝ひと各國からの來賓の歓迎を兼ねて國中が磨き立てられた感じだつたといふこともあるに違ひないが、その明るさにはもつと何か根據になるものがあつた。戦前の一九三〇年代、それよりもつと前の一九二〇年代と比べてであつて今日の日本で福祉國家と言へば一種の合言葉に過ぎなくてもその時は英國がそれを文字通りやつてのけたのだといふ感じが強かつた。それが今度行つて少しも違つてゐなかつたといふのである。

英國といふのは不思議な國で何かのことでどこまで無關心でゐられるだらうと思つてゐると或る時期になつて俄かに態度を改めてそれを實行に移す。例へば十六世紀邊りから十九世紀の前半まで家畜の品種の改良に力を入れたりする反面、英國での動物虐待には目を蔽はせるものがあつてさうして動

物を虐待するのが大衆が愛好する公認の見せものの一つにさへなつてゐた。それが十九世紀になつて動物は保護すべきものといふ方向に英國人の考へ方が變り、これが急速に立法その他の措置が取られる結果になつて今では英國のやうに動物が完全な形で保護されてゐる國は先づないと言へる。曾て奴隸貿易が大きな収入になつてゐた英國が奴隸制度の廢止を決定したのみならず、その海軍力を行使して世界的にこの貿易を絶滅したのも別な例である。又最近ではロンドンで輕油以外の燃料の使用を禁止することでロンドン名物の霧がなくなつた。

福祉國家といふのもこの國民性といふのか何といふのか解らないものの顯著な例でこの制度に就て日本でも色々聞かされはしてもその眼目は恐らくマルクス經濟學とは違つた意味で階級制度の打破にあり、事實これは福祉國家の實現によつて打破された。今から十六年前に英國が明るくなつたのを感じたのはその爲である。英國の階級制度にもひどいものがあつたので一九二〇年、一九三〇年代に英國にゐれば所謂、下層階級に屬するものはその卑屈な態度にも増して榮養不良による體格や顔色の惡さで一目で解つた。どうもこれは文獻などに徴して十六世紀邊りからなどとは言へなくて寧ろ十九世紀の産業革命による慘害の一つと思はれるが、さういふ慘めな人たちの中にゐると英國の冬が一層長くて暗いやうな氣がして來たものだつた。この時代そのものが第二次大戰を控へての英國全體にとつて暗い沈み勝ちな年月だつたことも事實である。併し産業革命からエドワード七世の治世に掛けての英國の所謂、繁榮の時代にもその間に大きくなつて行つたこの階級制度の弊害がいつも問題になつてゐたらしい。

それが福祉國家の實現で消えたのである。誰もが平等に教育、通信、参政などの我々日本人も知つ

てゐることのみならず榮養、醫療、娛樂といふやうなこれまでの機會を與へられることになればこれによつて最も益されるのはそれまでその機會を與へられてゐなかつたものでそれで身分を問はず、その身分では目下のものが目上のものに遠慮する必要もなくなればそれまでの不均衡で目上のものが目下のものに恥ぢることもなくなる。英國全體が恐らくは十九世紀以前の狀態に戻つて、又それにも増して明るくなつたのは當然のことに思はれてそれが今度も十六年前、又その後に行つた時に感じた通りだつた。これからどういふ制度上の變化があつてもこの制度は残るに違ひない。言はば英國は人間以外の動物といふ比較的に善良な生物の救済に先づ成功し、次に人間といふ筈にも棒にも掛からない兇惡な動物の存在を安定させるのに世界に魁をして一つの手を打つたといふことになるだらうか。今の所はさう見える。

その對象が人間であるだけに問題は色々あるやうでかういふ制度が實施された爲に人間に働く氣がなくなつたとか、安逸を貪る傾向が強くなつたとかいふことは今度行つた時はもう皆言ひ過ぎて既に仄かすだけで足りる恆久的な愚痴のやうになつてゐた。併しそれだから下層階級のもののが背が低くて顔色が悪い昔に戻つた方がいいといふことはない。又もし今まで苦勞して暮して來たものが樂になつて前程は仕事をしないといふのならそれは日本の社會黨が今日でも戦前同様に勞働爭議を自分達の生命と考へてゐるのと同じで少しばかり頭が働き始めればさうした缺點は補はれる。今度行つてよくしたものだと思つたのは大學一、二年程度の青年男女がこつちの留學時代と比べて恐しく眞面目になつてゐることだつた。もう革命でも共產黨でもなくて國の再建であり、このままでは英國が世界各